

## 非-政治的なものとしての政治哲学：メルロ＝ポン ティの政治哲学的転回をめぐって

山下, 通  
九州大学文学部：非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/1446186>

---

出版情報：哲学論文集. 47, pp.103-119, 2011-10-01. 九州大学哲学会  
バージョン：  
権利関係：

# 非政治的なものとしての政治哲学

——メルロ＝ポンティの政治哲学的転回をめぐって——

山下 通

## はじめに

本論の目的は、あらゆる政治的理念に対して懐疑的であると同時に絶対化を拒否する「非共産主義 a-communism」<sup>(1)</sup>としての政治哲学の意義と問題点を確認することにある。

第一節、第二節では、自由主義による政治の道徳化を『ヒューマニズムとテロル』において「カント的幻想」と批判したメルロ＝ポンティが、『弁証法の冒険』において同様の批判を「偽装したカント」という言い方で自らに向けたことの意味を検討し、第三節では「偽装したカント」に関連して、共産主義も自由主義も共に死や悲惨さを隠蔽しているという点で一致して欺瞞的であるというメルロ＝ポンティの主張を考察する。第四節以降では S.Krums: Communication and conflict (in *Merleau-Ponty Critical Essays* edited by H.Pieterma, University Press of America, 1989) 46,47, 51 M.Westphal: Situation and Suspicion in the Thought of Merleau-Ponty: The Question of Phenomenology and Politics (*Ontology and Alterity in*

Merleau-Ponty, edited by G.A.Johnson and M.B.Smith, Northwestern University Press, 1990) を参照しつつ、メルロ＝ポンティの現象学的哲学・身体論哲学と政治哲学との関係、非政治的なものとしての政治哲学という構想の意義と問題点について確認する。

## 第一節 『ヒューマニズムとテロル』から『弁証法の冒険』へ

『ヒューマニズムとテロル』そして『弁証法の冒険』という二つの政治哲学的著作の関係をどう考えるか。この問題はメルロ＝ポンティの政治哲学の全体像を把握するうえで大変重要な意味を持つ。『ヒューマニズムとテロル』を一読すれば明らかのように、彼はマルクス主義ならびに共産主義への共感を隠さず、むしろ「人間性を実現できる立場」<sup>12)</sup>、「真の人間的共存の始まり」<sup>13)</sup>を可能にするものとしてマルクス主義は唯一絶対的なものとして記述されている。

この議論（共産主義についての議論）の本義は、共産主義が自由主義的思考の諸規則を尊重しているかどうかを探求することにあってではない。共産主義が自由主義的規則を尊重していないのはあまりに明らかであり、そうではなく、共産主義が行使する暴力が革命的なものであるかどうか、人間たちの間に人間的諸関係を創出できるかどうかを探求されなければならない<sup>14)</sup>。

革命的テロルを正当化するものとして容認された暴力、そして革命的テロルのために暴力を正当化し、むしろ要求するマルクス主義に立つことを表明したメルロ＝ポンティは、しかし『弁証法の冒険』において一転してマルクス主義を批判すると共に、自らの政治哲学そのものへの自己批判を試みる。そして次の引用箇所はメルロ＝ポンティ自らが『ヒューマニ

ズムとテロル」において示した政治哲学への自己批判を表明するものとしてはしば引かれる箇所である。<sup>(5)</sup>

何をしても真理でありつづけ、証明と検証なしですますこのマルクス主義は、歴史哲学ではなかった。それは偽装したカントだったのであり、われわれが絶対的行動としての革命の概念のうちに最後に見出したのもまた、カントなのであった。<sup>(6)</sup>

結論から言えば『弁証法の冒険』においてメルロ＝ポンティは、かつての自分自身が示したマルクス主義理解を「なにをしても真理であり、証明と検証なしで済ませるこのマルクス主義」としてその形式主義的性格を断罪した上で、マルクス主義の理念だけを観念論的に擁護し続けることの不可能性を論じることになる。そして資本主義にも社会主義に依拠せず、むしろどのような政治的態度に関しても懐疑的態度を貫くと同時に、どのような政治的理念も絶対化しない「非-共産主義 2-communism」としての政治哲学を構想する。

たとえばS・クルクスはその論考の中でメルロ＝ポンティ政治哲学における大きな転回の存在を認めたとついで、一九五一年頃のいわゆる「言語論的転回」<sup>(7)</sup>と呼ばれる時期、ちょうどメルロ＝ポンティ没後に「世界の散文」として刊行された遺稿群が執筆された時期がまさにその転回の時期にあたると考えている。また、M・ウエストファルも自身の論考においてメルロ＝ポンティ政治哲学の大きな転回を認めている。<sup>(8)</sup>

しかし、この自己批判がいかなる意味を持つのか理解するためには、『ヒューマニズムとテロル』そして『弁証法の冒険』における彼の政治哲学的主張をpushingしておく必要がある。そしてメルロ＝ポンティが「偽装したカント」と呼ぶものが何を意味するのかを明らかにしなければならない。

## 第二節 偽装したカント

まずは、『ヒューマニズムとテロル』における議論を整理しておこう。この著作においてはマルクス主義的体制としての共産主義と、アメリカやイギリスなど資本主義体制としての自由主義との対立という対立図式が想定され、メルロ＝ポンティはマルクス主義的体制の側から資本主義・自由主義を批判する。今日の観点からすれば些か古典的かつ図式的な対立であるが、自由主義は、虚言と策略／真理の尊重、暴力／法の尊重、プロパガンダ／意識の尊重、政治的現実主義／自由主義的な諸価値という対比によって共産主義を批判する。たとえば共産主義が虚言と策略を用いる体制であるとするならば自由主義は真理を尊重する体制であり、共産主義が暴力を容認する体制であるとすれば、自由主義はあくまで法を尊重する体制だといっているのである。これが本当であるならば共産主義的世界は策略と虚偽と暴力に満ちた世界であり、自由主義世界は非暴力によって救済されたユートピア的世界だということになるだろう。しかし、そのような主張は欺瞞だとメルロ＝ポンティは言うのである。

いったい何が欺瞞だというのであろうか。それは「偽装したカント」という言葉の意味を考察することによって明らかになる。「偽装したカント」という言葉の意味を明らかにする為に触れなければならないのは、メルロ＝ポンティ自身が一九四六年に発表した「マルクス主義をめぐって」という論考である。この論考は『ヒューマニズムとテロル』刊行の翌年一九四八年に刊行された『意味と無意味』に収録されており、仮にここで便宜的に彼の政治哲学を前期、すなわち『ヒューマニズムとテロル』以前からその刊行までの時期と、後期すなわち『弁証法の冒険』以降の時期に分けるならば、前期のものである。この「マルクス主義をめぐって」においてメルロ＝ポンティは「民主主義についてのカント的幻想」というものについて語る。この論考は題目こそ「マルクス主義をめぐって」とされているが、内容は極右的・国家主義的イデオロギーのテ

エリ・モーニエ (Thierry Maunier 1908 - 1988) をめぐる考察に大部分が費やされ、『ヒューマニズムとテロル』の論点をすでに多く含むのでいぬ。

一九〇〇年のモース主義のうちには、民主主義についてのカント的幻想に対する或る健全な反動が含まれていた。民主主義的樂觀論は、人権が保証されている国にあつてはもはやいかなる自由も他の自由を侵害することはないし、自衛的かつ理性的主観としての人間の共存の安全が保証されていると考える。これは暴力というものは人類の歴史においてエピソードとしてしか出現しないものだし、特に経済的諸関係はおのずから公平と調和を実現しようとするものであり、結局のところ自然のおよび人間の世界の構造は合理的だと仮定することに他ならない。<sup>19)</sup>

ここで「民主主義についてのカント的幻想」は、「民主主義的樂觀論」と言い換えられ、そこにおいては暴力とは単なる例外的なエピソードであり、人権が保証されている限りは自律的・理性的な人間性とそのような人間性を備えた者たちによる共同体が約束されている。周知のように、カントにおいては善悪の判断基準ないし道徳性そのものは「意思の自律」<sup>20)</sup>によってこそ根拠づけられるのであり、しかもこの意思の自律は感性的欲望や他者による支配や国家権力・特定の信仰等の外的強制から自律したものでなければならぬ。カントは『実践理性批判』結語で次のように述べている。

それを考えることしばしばであり、かつ長きにおよぶに従い、常に新たないやます感嘆と畏敬とをもつて心を満たすものが二つある。わが上なる星輝く空と我が内なる道徳律がそれである。∴ 第二のもの（我が内なる道徳律）の観想は、私の人格性を通じて、知性としての私の価値を際限なく高め、この人格性において道徳法則は動物性から、さらには全感性界からさえ独立な生命を私に開示する。<sup>21)</sup>

カント倫理学ないし実践哲学を論じるという問題設定は本論の範囲を明らかに超えており詳論する余裕はないが、ごく簡略に次のように言うことができるであろう。この世界が自然法則によって、つまり因果性の連関によって埋め尽くされているとしたら、そして人間の行為もそうした因果性の環の一部としたら、人間の行為はたとえそれがどれほどの悪であったとしても自然現象と同列の現象だということになり、その行為に対する責任を問うことはできない。しかし現実的に考えれば、われわれは人間の行為を自然法則的因果性の必然的結果だと言って済ませることはできない。人間存在における倫理や責任・道徳が問題となり得るのは自然法則とは別の法則を原理とする世界であり、カントによれば、この世界の原理とは自由である。

自然法則にしたがって経過する諸現象の系列を、自ら始める原因の絶対的自発性が、したがって超越論的自由が想定されなければならない<sup>12)</sup>

カントの考える原理としての自由は、自然法則だけでなく快樂や衝動からの自由を意味すると同時に、何か実利的な目的に支配され、「<sup>13)</sup>のために」<sup>14)</sup>という手段としての行為を命じる「仮言命法」からの自由をも意味している。こうした自由の原理を根拠とするからこそ、行為の結果や目的に関係なく、自らの意志における格率が常に普遍的な法則として無条件に受当するように行為せよと命じる定言命法も可能となるのである。

しかし、メルロ＝ポンティにとっては、政治を意思の自由や自律、感性的経験から独立した普遍的に妥当する主観的格率に基づけようとすることは幻想に過ぎない。メルロ＝ポンティが「カント的幻想」と呼んだ自由主義的政治は、結局のところカントのより正確にはカント主義的な道徳観を現実の政治にも適用可能なものとして政治を道徳化し、他者を手段として扱わず、快樂や利益といった外的な目的のために行為することを拒み、ひたすら自らの意志の格率が常に立法原理とし

て妥当するよう行為する者達の「諸目的の国」に自らを重ね合わせているにすぎない。

### 第三節 宿命としての暴力

しかしメルロ＝ポンティにとって、このようなカント主義的な道德によってヒューマニズムを主張する自由主義的政治は、まさにその純粹さゆえに欺瞞的でありかつ暴力的なのである。この世界の内に身体的存在として存在する以上、われわれは決して暴力と無関係でいることはできない。そもそも、ヒューマニズムが暴力かという問い自体がすでに欺瞞なのであり、だからこそメルロ＝ポンティは次のように述べるのである。

われわれは純粹さと暴力とのあいだで選択するのではなく、多様な種類の暴力の間で選択するのである。われわれが受肉しているかぎり、暴力とはわれわれの宿命なのだ。<sup>13</sup>

われわれは状況に、そして歴史に巻き込まれる仕方では存在できない。定言命法の下、自らの行為が道德法則に必然的に合致するよう努めることはできるかもしれない。しかし、そのことと自らの行為が道德法則に必然的に合致するものであるかどうかは別の問題である。正確には、或る行為が普遍的な立法原理に妥当する行為かどうかは、行為そのものにおいて是不確定なままである。その行為自体と、それを取り巻く状況、その行為からの帰結が生み出した新たな状況が、あくまで事後的に、文脈的にその行為の価値を決めるのであって、われわれにできるのは或る状況下において選択できることを選択することだけである。われわれが状況内存在・世界内存在であることを忘れ、自らの有限性を見落とし、純粹意識の立場から道德的判断を下し得ると考える限り、自由主義的ヒューマニズムは欺瞞的なのである。



それではマルクス主義だけがヒューマニズムと暴力の問題を解決しうる唯一の道なのか。『ヒューマニズムとテロル』という著作全体を覆うトーンからすれば、そしてつぎのメルロ＝ポンティの記述から考えるならば、その問いにはイエスと答えるほかにないように思える。

マルクス主義が提案するのは人間の共生の問題をラディカルに解決することであり、絶対的な主観性による抑圧、絶対的な客観性による抑圧、自由主義によるみかけだけの解決を超える解決を示すことにある。<sup>14</sup>

こつした部分だけを選択的に読むならば、『ヒューマニズムとテロル』という著作は、自由主義の欺瞞を暴き、人間共存の問題をラディカルに解決しうる唯一の方途を示すものこそがマルクス主義なのだということを半ば教条的に主張しているだけのものに見えるであろう。しかし、事態はそれほど単純ではない。反共産主義者と共産主義支持者、彼の言葉を借りるならば「熱狂的シンパ」は或る点で一致している。どちらの側も決して無罪ではありえないという点で両者は一致するとメルロ＝ポンティは言つ。

反共産主義者は暴力はいたるところにあることを忘れており、熱狂的シンパは誰も暴力を正面から凝視することはできないことを忘れている。意識はわれわれが為していることを正当に判断することはできない。なぜならわれわれは歴史の闘争のなかに巻き込まれているからであり、この巻き込まれた状態において、われわれは自分たちが思っていること<sup>15</sup>よりもしくはそれ以下のことを、それとは異なることを行っているのだ。

反共産主義者、つまり自由主義であり資本主義者である者たちは、植民地での強制労働と先住民の死、日常に存在する人

間同士の争いや差別といった無数の暴力と死が自分たちに無縁ではないことに無自覚であり、そうした死や悲惨が自分たちの生と地続きであることを忘れている。そして共産主義者つまり「熱狂的シンパ」は、死が美しいのは描かれた歴史や芸術などイメージの中でしかないとすることを忘れている。死や悲惨を単なる偶発事、新聞の片隅のエピソードとして処理し隠蔽してしまうことも、死をイメージのなかに美化して再現することも、どちらも「死」という悲惨それ自体のリアルな実感、死の意味を漂白してしまうという点で、どちらの側も死者に対して決して無罪ではありえないのである。「ヒューマニズムとテロル」という著作は、その全体的なトーンからマルクス主義に対する教条的擁護、さらにはマルクス主義が孕む暴力性についての無自覚な容認という側面にばかり注目してしまいがちだが、この著作ならびにメルロ「ポンティ」がマルクス主義を相対化し、マルクス主義そのものうちにある欺瞞をも示そうとしている側面があることも指摘しておかなければならぬであろう。<sup>(15)</sup>

#### 第四節 哲学と政治の齟齬

『ヒューマニズムとテロル』において自由主義の欺瞞、隠蔽された暴力を明らかなものとし、マルクス主義的行動——時として暴力すらそのためには容認される——を正当化するメルロ「ポンティ」であったが、前述したように、こうした態度は『弁証法の冒険』において撤回される。そしてわれわれは再び冒頭で引用した次の一文へと立ち戻ることになる。

何をしても真理でありつづけ、証明と検証なしですますこのマルクス主義は、歴史哲学ではなかった。それは偽装したカントだったのであり、われわれが絶対的行動としての革命の概念のうちに最後に見出したのもまた、カントなのであった。<sup>(16)</sup>

皮肉なことに、かつて自身が自由主義を批判するために使った「カント的幻想」<sup>15</sup>という言葉をも、「偽装したカント」という言い方でマルクス主義そして自分自身に投げかけることになったわけだが、そこに或る種の転回が存在するとすれば、次の二つの問題が考察されなければならない。

第一は、そこで語られる政治哲学の性質の問題である。この政治哲学的転回は、自己批判の果てにそれまでの政治哲学がここで放棄され、別のまったく新しい政治哲学が現れることを意味しているのか。それとも、それまでの枠組みは存続されつつの継承的發展なのか。

第二に、前者、すなわち全く新規の政治哲学だとすれば、それは具体的にはどのような政治哲学なのかさらに問われることになるだろう。また、もし後者つまり継承的發展だとすれば、『弁証法の冒険』における政治哲学が『ヒューマニズムとテロル』の延長線上、すくなくとも一九四〇年代の政治哲学的論考の延長線上にある可能性を論じなければならないだろう。

本稿第一節で触れたS・クルクスは、メルロ＝ポンティの政治哲学が時事評論や瑣末なエッセイにすぎないという解釈を退け、むしろ知覚や言語、世界といった伝統的な哲学的主題を扱う哲学に極めて深く根ざしており、前者を理解するためには後者の理解が必要であると述べている。それと同時に、メルロ＝ポンティの政治哲学を特徴づける最もオリジナルな部分、すなわち「政治的な生を闘争とコミュニケーションの両義性」とクルクス自身が定義する部分は、実は一九四〇年代の初期の論考にすでにあるという見方を探っている。<sup>20</sup>クルクスが正しければ、メルロ＝ポンティの哲学全般にとつて政治哲学は密接な関係を持ち、なおかつ「闘争とコミュニケーションの両義性」という観点から政治哲学を構築するという姿勢は、『弁証法の冒険』における自己批判を経て一貫して不変だということになる。<sup>21</sup>

しかし、メルロ＝ポンティは『シーニユ』の序の冒頭で次のように述べる。

哲学的散文とほとんどすべて政治に関するそのときの発言と、この一冊を構成している兩者の間に、ふと見たところ、何という相違が、何という不調和があるのか！哲学においては道は険しいかもしれないが、一つ一つの歩みが次の歩みを可能にしてくれることは確信できる。政治においては、たえず道を付け直さねばならないという重苦しい感じがするのである。<sup>(12)</sup>

この発言をメルロ＝ポンティ自身による「哲学と政治の齟齬・不調和の表明」と解したならば、メルロ＝ポンティは自らの政治哲学の無効性・不可能性に言及していることにならないだろうか。

政治というものが「生の習慣」の類いのものであり、悟性を逃れるものであるのに、すべての哲学者が何らかの政治的見解をもたねばならないと感じているとしたら、それは大きな誤解ではないだろうか。哲学者の政治とは、誰も行わない政治である。そのようものが政治なのか？<sup>(13)</sup>

それだけではなく、哲学者が政治を問題にすること、そして政治哲学そのものの可能性すら疑問に付されているのではないだろうか。

本稿第一節でクルクスと同時に触れたM・ウエストファルは、『シーニユ』序文のこうした態度、すなわち哲学と政治の齟齬・不調和を認める態度こそ、メルロ＝ポンティの哲学と政治との関係をきわめてよく示すものだと考えている。<sup>(14)</sup> ウエストファルはアリストテレスの例を出し、アリストテレスが魂や物理学、刑而上学を『自然学』や『刑而上学』、『オルガノン』のなかで方法論と存在論が強固に結びついた仕方で論じ、他方『ニコマコス倫理学』や『政治学』において政治や倫理的問題を扱ったように、メルロ＝ポンティも現象学的・哲学的問題を『知覚の現象学』や『見えるものと見えないもの』で

論じ、政治については『ヒューマニズムとテロル』や『弁証法の冒険』で論じているだけであって、このような *existence* (理性的認識に根ざした知) と *phronesis* (実践的な知) の違いや区別はメルロ＝ポンティの場合にもあてはまると考える。つまり、M・ウエストファルは、メルロ＝ポンティが『知覚の現象学』や『見えるものと見えないもの』で展開した現象学的・哲学的議論と『ヒューマニズムとテロル』や『弁証法の冒険』などでの政治哲学はそれぞれ別の系列にあり、両者のあいだに大きな影響関係や内的連関を読み込むべきではないと考えるのである。<sup>(25)</sup>

メルロ＝ポンティが人間存在を生きられた世界と離れがたく結びつき、そこに住まう「身体」として、いわば世界内存在・環境内(状況内)存在として記述することで、経験論と主知主義の両者を批判的に乗り越えようとしたことは周知の事実である。それと同じ構造を政治哲学に読み込むとすれば、『世界内存在』というわれわれの存在構造を以ってマルクス主義と自由主義両者のドグマをくつがえすという戦略が、すなわち、経験論が主知主義か、共産主義が自由主義かの二者択一への強固な拒絶を通じて、あらゆるドグマを克服するという戦略が採用されていることを彼の政治哲学の中に見出し得るのである。<sup>(26)</sup>

しかし、こうした戦略は、メルロ＝ポンティ哲学における、特に政治哲学における限界であるとウエストファルは考える。<sup>(26)</sup>「世界の中に住まう」あるいは「状況付けられた主体である」ということから出発するメルロ＝ポンティの哲学は、経験論や主知主義、共産主義や自由主義などの独断論が、実は自分たちが世界によって限界付けられていることを忘れた「上空飛行的」思考であり、原理的に不可能であることを説明することはできない。しかし、なぜそのような独断主義的なものが我々の「政治的生活 *political life*」<sup>(27)</sup>のなかで不可欠な要素をなしているかを説明することができない。メルロ＝ポンティが言う様に、人間存在が世界内存在であり、それは同時に他者との共存存在である以上、人は何らかの共同体——国家や地域、宗教など呼び方は様々だが——の中で、共同体メンバーとして状況づけられて生きていくことになる。それは言語を共有し、歴史を共有し、様々な価値観を共有することである。すなわち共同体的な生とは、何らかのドグマ的なものを背負うという側

面から逃れることはできないものであるはずである。そう考えるならば、確かにドグマや偏見は克服されるべきだが、われわれの生存にとってドグマは不可避であり不可欠なものではないだろうか。ウェストファルによれば、われわれの生にとってドグマ的なものがなぜこれほどまでに避け難いのか、そして、それがどのように機能しているのかという問題にメルロ＝ポンティの政治哲学は答えることができないのである。<sup>(19)</sup>

### 最後に

人間存在が世界内存在・状況内存在であることを忘れ、純粋意識の立場からの道徳的判断を原理として政治を道徳化する自由主義的ヒューマニズムは、自身の暴力性に無自覚である点で欺瞞的である。その意味では、「カント的幻想」の中にある自由主義的ヒューマニズムは暴力的である。また一方のマルクス主義においても、政治はマルクス主義的革命とその成就という唯一の目的の為に手段化され、そこにおいては死や悲惨は革命という目的のために美化される。メルロ＝ポンティにとって、マルクス主義も自由主義的ヒューマニズムも共に欺瞞に満ちた「偽装したカント」なのである。

それでは、どのような政治が可能だとメルロ＝ポンティは考えるのか。かつての自分自身が示したマルクス主義理解を「なにをしても真理であり、証明と検証なしで済ませるこのマルクス主義」としてその形式主義的性格を断罪した上で、マルクス主義の理念だけを観念論的に擁護し続けることの不可能性、そして、資本主義にも社会主義に依拠せず、むしろどのような政治的態度に関しても懐疑的態度を貫くと同時に、どのような政治的理念も絶対化しない「非共産主義 a-communism」<sup>(20)</sup> を構想するのだが、こつしたどのような政治的理念にも拠らない政治というものが可能かという問いについては、ウェストファルの問題提起は非常に重要である。

ウェストファルの問題提起は、「このように「非共産主義 a-communism」という発想自体、メルロ＝ポンティ哲学の基礎

的な部分、すなわち人間存在の世界内存在性、状況内存在性を裏切ることになるのではないか、どのような政治的立場にも依拠しない政治が可能なのか、あらゆるドグマから解き放たれた生そして政治というものが可能なのかという点を問いただしている。

しかし、ウエストファルの議論からメルロ＝ポンティ政治哲学の不可能性を結論付けることは早急であると思われる。たとえばメルロ＝ポンティは『シーニユ』序において、「距離を隔てた働きかけ」という言い方で哲学と政治・歴史との関係を示唆した後、いま字びなおさねばならない哲学の姿を次のように述べるのである。

それ自身の責任を有しているだけに政治の責任によって縛られることが少なく、誰にも取って替わられず、情念や政治や生に耽溺することがないだけに、またそれらのものを想像界のなかで作り返すこともせず、われわれが住まう存在 *Être* を明確に開示するだけに、どこにでも自由に入ることのできる哲学を再び字ばねばならない。<sup>21)</sup>

メルロ＝ポンティ自らが指摘するよつに、何らかの政治理念の可能性に賭ける限り、その政治哲学は或る特定の理念によってドグマ化する危険性を孕むことになる。どのような政治理念からも独立した政治哲学というメルロ＝ポンティの構想自体をウエストファルは疑問視するのだが、この疑問にどう答えることができるのか。それに答える為には、メルロ＝ポンティの言う「非共産主義 *a-communism*」の内実を明らかにすること、そして「ヘーゲル以後の哲学と非哲学」と題された、マルクス主義を扱った晩年の講義録<sup>22)</sup>も含めて考察することが必須であり、それについては稿を改めなければならないが、筆者は、メルロ＝ポンティがいま字びなおさねばならない哲学の姿として構想した哲学の記述にその鍵があると考えている。何らかの政治的理念に拠るか／拠らないかという二元論を超えて、むしろ政治哲学そのものを哲学するという、言わばメタ政治哲学こそが、メルロ＝ポンティが目指すところの政治哲学であり、それは特定の政治的理念のための政治哲学ではなく、政治

哲学そのものについての哲学であり、われわれが住まう存在 l'Être を記述しつつある哲学でなければならぬのである。

註

- (1) Merleau-Ponty, *Les aventures de la dialectique*, Gallimard, 1955, p.257 (256)
- (2) Merleau-Ponty, *Humanisme et Terreur*, Gallimard, 1947, p.127 (159)  
引用に関してはメルロ＝ポンティのテキストから訳出したが、適宜みずす書房版による翻訳も参照した。以下、引用については原書ページの数の後の括弧内に翻訳のページ数を付す。
- (3) *ibid.*, p.129 (161)
- (4) *ibid.*, p.130 (162)
- (5) 本論で取り上げている S・クルクスと M・ウエストファールの論文のほか、港道隆氏も『メルロ＝ポンティ』(廣松渉との共著 岩波書店 一九八三年)の p.114 の『ユニオニズムとテロル』におけるマルクス主義的態度の放棄を『弁証法の冒険』のうちに確認し、また松葉祥一氏も論文『普遍性要求と暴力』(『哲学的なもの』と政治的なもの』、青土社、二〇一〇年 所収)において『弁証法の冒険』を政治哲学的転回点としたうえでメルロ＝ポンティ政治哲学を論じている。
- (6) Merleau-Ponty, *Les aventures de la dialectique*, Gallimard, 1955, p.321 (318)
- (7) Sonia Kruks, Communication and conflict, in *Merleau-Ponty Critical Essays* edited by H.Pieterma, University Press of America, 1989, p.178
- (8) M.Westphal, Situation and Suspicion in the Thought of Merleau-Ponty: The Question of Phenomenology and Politics (Ontology and Alterity in Merleau-Ponty, edited by G.A.Johnson and M.B.Smith, Northwestern University Press, 1990), p.176
- (9) Merleau-Ponty, *Sens et Non-sens*, Gallimard, 1947, p.124(150)
- (10) Immanuel Kant: *Kritik der praktischen Vernunft*, 1788, p.33 (54)



参照したテキストは Felix Meiner 社の Philosophische Bibliothek であり、頁付けは原版に従う。また翻訳（波多野精一・宮本和吉訳、岩波文庫 一九七九年）も適宜参照した。括弧内の数字は翻訳でのページ数を表す。

- (11) *ibid.*, p.161-p.162 (225-226)
- (12) Immanuel Kant, *Kritik der reinen Vernunft*, 1781/87, A446, B474 (中巻 | 四 | )  
参照したテキストは Felix Meiner 社の Philosophische Bibliothek であり、頁付けは慣例に従い原点の I 版を A、第二版を B としてその頁数を示す。また翻訳（原佑訳、平凡社ライブラリー版、二〇〇五年）も適宜参照した。括弧内の数字は翻訳でのページ数を表す。
- (13) Merleau-Ponty, *Humanisme et Terreur*, Gallimard, 1947, p.127 (159)
- (14) *ibid.*, p.42 (44)
- (15) *ibid.*, p.42 (44)
- (16) しかしながら、『知覚の現象学』その他の著作で歴史の持つ意味 *sens* の偶然性を肯定しながらも、『ヒューマニズムとテロル』においては「ロレタリアートによる革命と救済」という歴史の可能性を重視するあまり、唯一的なマルクス主義的目的論的世界観に閉じてしまふ危険性をメルロ＝ポンティの政治哲学は孕んでいる。この点については拙論『メルロ＝ポンティ政治哲学における歴史の意味と偶然性』（哲学論文集 第四六号、九州大学哲学会、二〇〇九年、p.65-p.80）を参照いただければ幸甚である。
- (17) Merleau-Ponty, *Les aventures de la dialectique*, Gallimard, 1955, p.321 (318)
- (18) Merleau-Ponty, *Sens et Non-sens*, Gallimard, 1947, p.124 (150)
- (19) Sonia Kruks, *Communication and conflict*, in *Merleau-Ponty Critical Essays* edited by H.Petersma, University Press of America, 1989, p.179
- (20) *ibid.*, p.179
- (21) この点については拙論『メルロ＝ポンティ政治哲学における歴史の意味と偶然性』（哲学論文集 第四六号、九州大学哲学会、二〇〇九年、p.65-p.80）を参照のじゆ。
- (22) Merleau-Ponty, *Signes*, Gallimard, 1960, p.9 (1)

- (23) *ibid.*, p.13 (4-5)
- (24) M.Westphal: Situation and Suspicion in the Thought of Merleau-Ponty: The Question of Phenomenology and Politics (*Ontology and Alterity* in Merleau-Ponty, edited by G.A.Johnson and M.B.Smith, Northwestern University Press, 1990) p.159
- (25) *ibid.*, p.160
- (26) *ibid.*, p.172
- (27) *ibid.*, p.173
- (28) *ibid.*, p.173
- (29) *ibid.*, p.173 それに加えて、共產主義と自由主義の対立の場面での独断主義・教条主義と、経験主義と主知主義の対立の場面での知性・知識を回すの場を踏まえつついかんにかんじやまた一つの問題である。
- (30) Merleau-Ponty, *Les aventures de la dialectique*, Gallimard, 1955, p.257 (256)
- (31) Merleau-Ponty, *Signes*, Gallimard, 1960, p.26(16)
- (32) *ibid.*, p.26 (16)
- (33) Merleau-Ponty, Philosophie et non-philosophie depuis Hegel in *Notes des cours au Collège de France: 1958-1959 et 1960-1961*, Gallimard, 1996

(本学文学部・非常勤講師)

